

伝文

日本口承文芸学会 会報

第 63 号 2018 年 9 月 発行

日本口承文芸学会

〒150-8440 東京都渋谷区東 4 - 10 - 28

國學院大學文学部 飯倉義之研究室

Tel : 03-5466-0529 (研究室)

Fax : 03-5466-0368 (日本文学資料室)

E-mail : info@ko-sho.org

「蛇婿入り」雑感

常光 徹

先日、ある会で「蛇婿(贅)入り」について話す機会があった。といっても、この昔話に特別の関心があるわけではないのだが、たまたま「蛇婿入り」が私の担当になったのである。それでも、久しぶりに関連の文献を読み直してみた。周知のように、「蛇婿入り」は芋環型と水乞い型に大別される(『日本昔話大成』)。芋環型は、『古事記』の三輪山神話を始め『平家物語』に緒方家伝の記載がみられ、現在も昔話や伝説として語り継がれている。歴史的な系譜の辿れるまれな話といってよい。もう一つの水乞い型は、「猿婿入り」などの異類婚姻譚との関係が予想される分布の広い話である。

この二つの型を整理しているうちに、なんとなく不自然というか、「蛇婿入り」としてまとめることに無理があるように感じた。大雑把だが、水乞い型のモチーフ構成を示すとつぎのようになるだろう。

A①爺の田が潤れる(収穫の危機) ②**交換**・水を当ててくれれば三人娘の一人を嫁にやるという ③蛇が聞いて田に水を当てる(危機の解消) + B①爺は心配で寝込む(嫁が未定の危機) ②**承諾**・末娘が引き受ける ③爺は元気になる(危機の解消) + C①蛇が化けた男が来て娘を連れて行く(人間界を去る危機) ②**退治**・淵に瓢箪と針を投げ入れて殺す ③娘は蛇から逃れる(危機の解消)

水乞い型は、交換・承諾・退治という中核的な機能を中心に三つのモチーフから構成されている。これに姥皮が接続する場合もあるが、基本的には「猿婿入り」や「猪婿入り」などと近い、というよりも同じ話型と認められる。では、芋環型は昔話の場合はどうだろうか。

○1 夜、娘のもとに見知らぬ男が通ってくる(正体不明の危機) ②**剔抉**・糸をつけた針を刺し、たどって行く ③男は蛇で死ぬ、娘は蛇の子をおろす(危機の解消)

最後は節供の由来に結びつく例が少なくない。こうしてみると芋環型と水乞い型は本来異なる話型で、私を感じた違和感もこのあたりに起因するのだろう。『日本昔話通観』では「蛇婿入り」を九つの型に分類している。そのうちの、針糸型・立ち聞き型・豆炒り型は基本的に芋環型と、嫁入り型は水乞い型と共通すると思われる。

私たちが恩恵に与っている昔話の分類や話型は、先学の研究成果の賜物であることは言うまでもない。たまたま「蛇婿入り」について感想を述べたが、これまでの蓄積をもとに、話型についても新たな検討が期待される。

(千葉県)

「シンポジウム：口承文芸と文学-泉鏡花・井上ひさしの口承世界」

今回のシンポジウムは、創作文学と伝承世界の共通性、あるいは、創作文学と作家の人生体験という視点から、口承文芸と文学の関係を見ようとした。パネリストは、伊藤高雄氏が「泉鏡花と口承文芸—俗談・巷説



の世界からの創造」と題して、根岸英之氏が「〈異化〉する語り手としての井上ひさし—「藪原検校」「花石物語」「父と暮らせば」から—」と題して、発表された。

伊藤氏は、泉鏡花の文学は、軽妙、洒脱な俳味をもち、迷信・俗信・民間信仰などが溶け込んで、謎めいたあやかしい雰囲気満ちており、日常に潜む魔のさす瞬間をとらえていると指摘する。民俗事象との結びつく一例に、『蛇くひ』に使われている童謡は、静岡県浜松市引佐町の年頭に行われる火踊りの歌詞と繋がっているという。鏡花は俗談・巷説の豊かな世界にひたり、耳と体で口承文芸を吸収し、俗信や民間信仰にある、民衆の伝えてきた価値を救い上げたと評価される。現代の風俗を描きながら、そこに伝承されてきた民衆の世界観を、形を変えて登場させる。例えば、汽車・電車という乗り物、カバンという入れ物、それらに、容器の中の神秘性や片袖にまつわる呪術性などを踏襲しているという。周知のように、柳田国男と折口信夫は鏡花と親交があり、その文学に共感していた。民俗学が近代日本の中に発見しようとしたひとつの理想形が、鏡花の作品に結晶化されているからだと言及する。

根岸氏は、井上ひさしという作家が、ことばにこだわりをもつことの根源は、東北に生まれ育ち、昔話を豊富に聞いた伝承体験にあるという。また井上は、口承文芸学者の研究・資料収集成果を踏まえており、東北の奥浄瑠璃や早物語、各地の伝説、俗談・艶笑譚などをモチーフとして作品に取り込んだ。井上も、鏡花と同じく、正統派学問が無視してきた分野を取り上げ、作品の中心に置いた。井上は、語り手の重大性を意識しており、さらに物語を紡ぐ作家も、語り手であると認識していると、根岸氏は指摘する。語り手としての作家とはどういうことか。戦争や津波、地震から生き残った者は、死者の思いを次へ語り継いでいくことが生き残ったことの意味だ。そこを作品化することが語り手としての作家であり、聞き手、つまり読者との関係が生まれるのだという。根岸氏は井上の作品のある部分を声に出して「語っ」た。単に読むでなく、演じるでもなく、まさに「語り」であった。その場にいた聞き手たち＝参加者は、根岸氏の声を通して、井上が表現しようとしたことを感じる事が出来たと思う。

お二人の発表の後、参加者のからは、「個」を問う近代文学と泉鏡花・井上ひさし、あるいは柳田、折口を踏まえての「語る」と「聞き手」、さらに作家の生原稿に残された「字」から作家の「声」を偲べるかなど、興味尽きない発言が続いた。

2018年6月2日-4日

第42回日本口承文芸学会大会（大阪府柏原市・関西福祉科学大学）

6月2日

第42回日本口承文芸学会大会

公開講演会報告1

廣田 収（大阪府）

伊藤 慎吾氏「語り物文芸の異類合戦物について」

伊藤氏は冒頭で「私は民俗学者でなく、仮名草子・御伽草子の専門」であると自らの立場を表明された。そして「異類合戦物」が「人間以外の動物」の戦いであり、「荒唐無稽」でありながら、結局は「人間の物語」であるという。そしてこれは、室町期の公家が読み、禁裏の女房たちも読み、子どもも大人も「楽しむ」ことを目的として作られた作品群であったという。さらに「異類合戦物」は『平家物語』を始めとして軍記物語の影響を受けている。特に、「言葉遊び」や「故事を踏まえる」ところに特徴があり、合戦よりも文章表現の面白さが重要であるといわれる。

伊藤氏の報告の具体的な指摘に及ぶ紙幅はないが、異類合戦物の特徴として伊藤氏は、A 軍記物に倣った文体/B 人名に擬したキャラクター/C 軍記作品に基づくエピソード/D 両軍の勢揃いの描写/E 合戦時の出で立ちの描写/F 対戦者もしくは敵陣に向けての名乗り、などを挙げるとともに、「古い語り物の特徴」として「文字から語りへ」といった「語りの変容」を指摘された。すなわち、①草双紙の語り物化、②構成の流動化、③単純化、④挿話の取り入れ、などに異類物の「背景」があり「日本文化の特質」があると結んでおられる。

私が興味深く感じたことは、語り物「餅合戦」の録音から伝承の分析を試み、文献としての異類合戦物とを突き合わせることで、口承の語り物と文献としての「異類合戦物」との関係を探ろうとされたことである。最近よく話題になることであり、大会翌日のシンポジウムの討議でも話題になったこととも呼応するのだが、個別学会で研究の専門化、細分化が進んだ状況からすれば、伊藤氏の講演は、口承と書承との緊張関係を真正面から課題とされた点で刺激的なものであった。

さらに時間が許すのであれば、会場から質問があったように、合戦や名乗りの詞章、言葉遊びの表現の具体的な分析を、伊藤氏が展開されていれば、伊藤氏の意図されるところがより一層深く説明できたであろうと感じた次第である。

公開講演会報告2

高塚 さよ（神奈川県）

真鍋 昌賢氏「『漫談』の誕生-行為する言葉とその思想-」

真鍋氏は、これまで浪花節等を題材にした研究において、〈口頭芸〉という概念を設定するなど、常に斬新な視点で口承文芸研究に取り組み、新たな風穴を開けてこられた。漫談は口承文芸研究では対象とされてこなかったジャンルである。その理由として、氏は、漫談が映像に従属していること、個人芸の要素が強いことを挙げられた。一方で、漫談は近代という時代において新たに生まれた大衆向けの声の系譜であり、そこに蓄積された技術や演技法は戦後の大衆文芸を考える上で重要であるこ

とを指摘された。そして、漫談とそれを担ってきた活動写真弁士の系譜を考えること、つまり敢えてアカデミズムの中で取り上げられていない時代やジャンルを研究の俎上に載せることで、口承文芸研究における視野の幅を広げていきたいという、氏のこれまでの研究姿勢にも通じる問題意識を提示された。具体的には、活動写真弁士・大辻司郎を取り上げられた。漫談を演芸ジャンルに掲げた人物である。初めに大辻の声と芸の特徴について検証された。大辻の声は、当時の一般的な映画説明である事実確認的な声とは異なり、浪花節調や講談調など既存のジャンルでは喩えることができない異質なものであった。代わりに奇声という言葉で象徴される新鮮な声であり、映像の説明を越えて、笑いを誘発していく行為でもあった。つまり大辻は映画説明から逸脱していく声と芸を漫談として括り出していったのだと言う。次に漫談という言葉が、大辻の芸とは離れて、新聞・雑誌・ラジオなどで流行していく過程を示された。最後に、大辻が漫談というジャンルにどのような思いを抱いていたのか、大辻自身の言葉から分析された。そこには漫談をスケッチや日常茶飯のモダン化と表現し、生活の手段、生きていく上での知恵としての漫談、実際にあるようなリアリティさを求める思想があった。それは日常生活を異化する視線に基づいていた。そして、大辻にとっての漫談はメディア横断の中で一貫したキャラクターを演出する手段であったとまとめられた。今後の展望について、漫談というジャンルに焦点を当てることで、大衆文化史のなかの活動写真弁士の系譜を捉え、延いては1920～40年代という時代を口承文芸研究として問うていくチャンスになること、さらにはアナウンサーの実況中継やアニメーションの声優といった近代の声を視野に入れていく必要性、あるいは万歳と漫才や漫談と落語の関係性を考えていくことなどを挙げられた。氏は、本講演で、「声が人の心をどうつかむのか」、口承文芸研究における発語行為の解釈や比較という研究方法を再認識することで、研究方法と対象の視野を拡張していく可能性について改めて示唆された。氏の新たな方向性に触れることができ、今後、口承文芸研究において共有すべき課題であると感じた。

6月3日

第42回日本口承文芸学会大会 研究発表報告（第1会場-1・2） 松本 孝三（大阪府）

李 軒羽氏「中国と日本における都市伝説の比較研究-学校の怪談を中心に-」

日本の都市伝説「学校の怪談」や「口裂け女」などの先行研究を参考に、発表者が母国中国における今日の都市伝説の研究状況、パターンの分類、モチーフにおける両国の共通点・相違点、社会的な意味について、自らのアンケート調査・インタビューの結果に基づいて比較考察したものである。

近年SNSによる伝承の展開が話題になっているが、中国でも「微信(ウィーチャット)」によるうわさ話が都市伝説になって行く例もあるという。しかしまだ研究の歴史は浅く、問題点も多いのが現状という。その中で、李(リ)揚(ヨウ)、張(チョウ)敦福(トンフク)という研究者の業績が紹介されたのは注目される。また、具体的な話例として「トイレ系怪異」の舞台が日本では小学校なのに対して中国では大学であり、それは大学城の施設における治安問題に関わるとの指摘や、「七不思議系怪異」についても大学内の寮生活における怪異譚であり、学校の擬似的な歴史を語り継ぐことを目的とするとの指摘、大学の鳥瞰図が棺のように見え、風水学的に縁起が悪いので凶事が多発するといった、土着宗教や民間信仰の影響を認める指摘など、日中の相違点が鮮明に述べられた。あるいは中国独自の「保研路」という大学院

の裏口入学にまつわる話が学生のSNSの中で伝えられているとの分析も興味深かった。中国の都市伝説には、大学生を取り巻く社会問題を否応なく内包しながら伝承されるといった特徴が窺えるようである。

フロアからの意見にもあったが、気になるのは従来の調査資料とネット上のそれとの落差をどう考えればよいのかということ。口承資料の資料性、文芸性について研究者共通の課題とすべきであろう。

藤井倫明氏「童話化された昔話—坪田譲治の『新百選日本むかしばなし』—」

昔話が伝統的な語りとして聞くものから、多く絵本や児童向けに再構成された本によって読まれる現在、昔話の再構成についての考察が必要であるとして、大正～昭和前期に活動した童話作家・坪田譲治を取り上げ、昔話の童話化とその業績の再評価、童話化の歴史における位置付けを試みる。

発表では坪田が童話化した昔話の集大成と見られる『新百選日本昔ばなし』を取り上げる。そこには昔話の童話化への再構成に並々ならぬ情熱が感じられるという。『新百選』編纂に協力した大川悦生は、坪田には自らの昔話採集の意思はなく、また昔話資料の卑俗・下品・残酷といった不純な要素を細心の注意で削除・修正しているという。そこには関敬吾が批判的に指摘するように、昔話は坪田にとって単なる素材であり、むしろ再話を目的とした創作に近く、坪田文学と呼べるものであろうとする。また、戦中から戦後にかけての坪田の数種の著作における比較から、同一話の取り上げ方の相違などについても個々に詳細な検討がなされた。さらに坪田が童話化すべく原拠とした昔話や昔話資料集の地域的な特定作業も興味を引いた。また、『新百選』の章立てや新たに書き下ろす昔話の選定に、同時期に成立した関敬吾の『日本昔話集成』を参考にしてきた可能性への言及もあり興味深かった。東北と南方の昔話に何らかの思い入れがあったという指摘にはさらなる考察が欲しいところである。

フロアからは、坪田には笑話も少ないようであり、また何をもって不純な要素と考えていたのかといった質問や、柳田國男の『日本昔話名彙』からの影響についての質問があり、丁寧に対応していた。昔話と童話の関係については発表者が継続して研究しており、今後のさらなる展開が期待される。

第42回日本口承文芸学会大会 研究発表報告（第1会場-3・4） 野村 典彦（東京都）

佐藤 喜久一郎氏「羊太夫伝説の全体像」

渡来人の文化、あるいは芸能的宗教者集団や特殊な職能民の活動に遡源する方向で、これまで研究されてきた群馬県の羊太夫伝説を、近世～近代の文脈のなかで読み直す。

『小幡羊太夫縁起』は地域住民の歴史観によって改変され、歴史的権威の拠り所とされていた。近世の考証学も受容しながら歴史叙述が重ねられる。核たる多胡碑から離れた地域に文書が発見されることに発表者は注目し、伝承が拡大することによってより多くの人々が物語世界に参入、さらなる物語の生産につながったと述べる。物語中の人物を連想させる名で世間を渡った者や自らの系図を物語に接続させる者もあった。草むらに埋もれていた多胡碑は1775年には整備され、1823年には拓本の販売の利権も絡む訴訟も起こった。地下に隠れた部分を見た者は目が潰れると言われていたが、明治初期と終戦直後に二文字の存在が確認された。「八」「国」か「羊」「国」だった。群馬八郎や「国の父」を称えたものと発表者は推論する。

近世の文書を資料として、物語が再創造される状況が「全体像」のタイトルのもとに説かれた。「口から耳へ」の伝承という視野では捉えきれない活発な営みが、地域社会で行われていることの報告。人々にとっての文字の力、紙の力も考えさせられる。だとすれば、発表資料に記述された「従来の口頭伝承を文字化して由来書などに編み直す」も再考してよいのではないかと発表を聞きながら感じた。

矢野 敬一氏「平田篤胤から柳田国男へ—問いを共有するオーラルな場と民間学—」

新国学＝民俗学とのつながりにおいて平田篤胤をみる相良亨以来の評価を問い直す。まずは柳田文庫の蔵書を手がかりに、若き日に幽冥や怪談への関心から篤胤に接近したものの、国学全般への関心へは広がらず、大正期には篤胤全集を所蔵しようとするまでの関心を持っていなかった、と柳田の篤胤観を見定める。また、『霊能真柱』は『古事記』等の再構成であり、古代への関心や世界観構築への欲求を強く持たない柳田にとって満足できる思想ではなかったと判断。

その上で、柳田の初期の三著に「共著」者とも言うべき存在があること等も含め、篤胤と柳田との連続性を、聞き書きという手法により文字世界を相対化しようとする方法に見る。そして、篤胤の気吹舎と或る時期の民間伝承の会とを重ね見て、オーラルな場を軸として立ち上げられた民間学の流れを浮かび上がらせる。

篤胤と柳田を「かたる一きく」という視点から結び直そうという興味深い試みである。篤胤の文章そのものが資料として提示されていなかったため、質疑応答の広がりを持てなかったのが惜しまれる。

第 42 回日本口承文芸学会大会 研究発表報告（第 2 会場-1・2） 奥田 統己（北海道）

阪口 諒氏「イナウの靈魂の循環-北海道アイヌの口承文芸から-」

本発表は、アイヌの伝統的な信仰・世界観において神々への捧げ物となるイナウ（木幣）の靈魂のありようを、口承文芸資料から読み取ろうとしたものである。まず、動植物や器物の靈魂が神の世界と人間の世界を循環することについての先行研究を確認し、これに対してイナウが捧げ物として神の世界へ送られるときには、他の器物などと異なり靈魂の行方がとくに語られないという問題を提示した。さらに「イナウの靈魂 イナウラマツ」という表現の意味は「先祖代々の祭祀を絶やさないこと」だとする伝承や、イナウは人間にしか作れないが起源となったのは天から降ろされた男女のイナウだとする伝承のあることを示し、発表者の解釈として、神は人間の世界でなければ子孫を増やすことができないので、人間が儀礼でイナウを作り続けることではじめて、イナウも子孫を増やすことができその靈魂が循環すると結論づけた。この解釈によって、神が人間にイナウを伝えたとする伝承と、その神が人間の作るイナウを欲しがるとする伝承などの矛盾が解決するという。興味深く示唆に富む研究であるが、イナウの靈魂が「循環」という理解に至る道筋をよりはっきり説明していただければありがたかった。また、やはり神が授けたとされたり魂を持つとされ神に対して唱えられるが、とくに男女対だという伝承のない「言葉 イタク」などとイナウを対比すれば、今後さらに議論が発展するだろう。

安田千夏氏「北海道アイヌ口承文芸にみるカラス神の性格と名称」

本発表は、北海道アイヌの口承文芸においてカラスがどのように描かれるか、またそうした描かれかたが生物学的な特徴や生態とどの程度整合するか、という問題を検討したものである。まずカラスが登場する説話のパターンを、神話・散文説話であわせて9種（「カラスの失敗」「夫の浮気」「発話」「逃走指示」「暗示」「人助けと祭祀由来」「人との婚姻」「人さらい子育て」「起源、由来」）に整理し、そのうち「起源、由来」には日本の「ふくろう紺屋」に類似するものがあること、「人さらい子育て」には北海道西南部から東北部にかけて類似した挿入歌（反復句）がみられることを指摘した。また「人助けと祭祀由来」のパターン自体には鳥類を含むさまざまな動物神が描かれるが、そこでカラス神が登場する事例は北海道西南部の沙流地方に限ってみられること、そこではハシボソガラスが「ひときわ大きい」「カラスの首領」として描かれるが、実際には体の大きいのはむしろハシブトガラスのほうであり、かつ両者は混じって群れをなすので生態と善悪を結びつけるのは難しいことを指摘した。結論として、カラスについては種名と口承文芸中のキャラクター名を区別して考えるべきである、つまり現実世界と物語世界の重なりは一対一の対応ではないと考える必要があることが述べられた。口頭伝承と動植物の生態との対応関係という大きな課題への先駆的なアプローチであり、今後のさらなる展開が期待される。

第42回日本口承文芸学会大会 研究発表報告（第2会場-3・4） 奥田 統己（北海道）

北原次郎太「人格神の習合を考える-アイヌ・朝鮮の神話を手がかりに-」

本発表は、アイヌの口頭伝承において世界や文化の創造あるいは魔神や邪神の退治などの役割を持つ、人の姿をした神「人格神」を取り上げ、その伝承の成立過程を周囲の諸文化と対比しながら考察したものである。まず先行研究として、起源的に一つの神格だった人格神がさまざまな神格に分化したとする知里説と、いくつかの神格が習合し単一の人格神とみなされるようになったとする金田一説を紹介した。そして先行研究がじゅうぶん分析していなかった北海道・樺太各地の伝承を検討し、さらに朝鮮半島、台湾、琉球、本州の説話・伝説のなかにみられる類話との対比を行った。結論として述べられたのは、まず「愚兄賢弟」「創世の巨神」「姉に養われる孤児」などを含む多様な性格を一つの人格神が持つようになったのはやはり習合の結果とすべきこと、本州、琉球、朝鮮などとの伝播関係を考えるべきモチーフや話型があること、地域によって優勢な人格神が異なるので伝播はそれぞれの神格が成立したあとで起きたとすべきこと、話型ごと新たに取り入れられたらしい神格もあること、そして単一の神格への習合は伝播のあとに起きたと考えるべきことである。壮大な問題提起に対し、質疑ではオオクニヌシの多様な性格・異名との対比や、アマミキヨ・シネリキヨのような夫婦神の伝承との対比の必要性が示唆された。今後は伝播と習合の過程のより詳細な推定と、周囲の諸文化のデータとのさらなる対比が求められる。

邊恩田氏「朝鮮王朝時代の儒者に伝わった日本の「こぶとり」

本発表は、慶長の役（丁酉倭乱）で捕虜となった朝鮮王朝の儒者睡隱姜沆が帰国後記した「癩戒」と日本の「こぶとり」説話を対比し、「癩戒」の特質、日本がわの典拠、姜沆がこの物語を記した意図などを論じたものである。まず姜沆が日本に囚われていたあいだ藤原惺窩と交流があったことを、先行研究を参照しながら確認した。そして「癩戒」の描写の特徴として、人物を「正直／意地悪」「踊りが上手／下手」といった対立的な評価で描いていないこと、問答が三回繰り返されるなど口承話の要素がみられること、鬼のがわでも「信」を重視して癩を取ったり返したりしていることを指摘した。さらに結末の評語も「人を羨んではならない」や「人の真似をしてはならない」ではなく、捕虜となった恥と帰国して再び出仕する恥とを「前恥」「後恥」とする儒者的な信条であると述べた。そして、「信」を重視する評語を持つ「こぶとり」が『五常内義抄』にみられることから、同書を読んだ惺窩の語りが「癩戒」のもとになっていること、また冒頭の「呂宋」という設定も惺窩が明に渡ろうとしたときの経験を反映していることを推定した。質疑では、『五常内義抄』との関連性の指摘には蓋然性があるが、設定に多少違いがあるので口承テキストを媒介としている可能性を検討すべきだということが確認され、また『醒睡笑』が典拠である可能性をめぐり、同書の成立と姜沆が囚われていた時期との関係などが議論された。

第 42 回日本口承文芸学会大会 シンポジウム報告

姜 竣（東京都）

シンポジウム報告「ローカルなものの生き延び方—現代における人形儀礼の再文脈化—」

単なる移行点でしかない、均質で空虚な時間をたどり続ける歴史の連続を打ち砕いて、抑圧された過去のいまここに唯一無二の存在としてあるものを救済＝解放すること（ヴァルター・ベンヤミン 1995「歴史の概念について」[歴史哲学テーゼ]『ベンヤミン・コレクション①近代の意味』久保哲司ほか訳、筑摩書房）。ネオリベラリズムが席卷する世界資本主義の下で、パッケージ化により勝利する道を進まない、敗北したローカリティの生き延び方を追究すること（関根康正 2009「パッケージ化と脱パッケージ化との間での生きる場の創造、あるいは「組み換えのローカリティ—「資本としての知識」から「資源としての知識」への視点の移行がもたらすもの」関根康正編『ストリートの人類学 下巻』国立民族学博物館）。イデオロギーとしてのノスタルジアの蔭に隠ぺいされてしまった経験としてのノスタルジアを救い上げること（ジェーンマリー・ロー 2012『神舞い人形—淡路人形伝統の生と死、そして再生』齋藤智之訳、私家版[Jane Marie Law, Puppets of Nostalgia: The Life, Death, and Rebirth of the Japanese Awaji Ningyo Tradition. Princeton: Princeton University Press, 1997.]）。

これらを指針として、あらゆるものがナショナルな次元を疾うに超えた諸力に浸食され、断片化し流動化しつつあるネオリベ状況下で、向き合うべきローカリティとはいかなるものあるかを、われわれの認識と方法から抜け落ち、やり過ごされ、語りえなかったものたちの生き延び方の前衛性に着目しながら追究するために本シンポジウムは企画された。その内容は、平成二十七～二十九年度に JSPS 科研費 JP15K03066 の助成を受けた研究（「人形芝居における儀礼の復活と門付の伝統に関する研究—淡路人形芝居を中心として」研究代表者・姜竣）の成果の一部である。

森田良成は映像人類学の手法により、徳島県三東みよし町における門付の現在を、受け入れる側の視線から捉える映像作品を制作した。分担者の山田巖子は、東北におけるオシラ神信仰の儀礼と阿波木偶廻しのそれとを比較する視角から、青森県津軽地方において真言宗の寺院が統括する新しい信仰形態と、祭祀の場での憑依現象を軸とする福島県会津地方のオシラ神信仰とを対比させながら、藩政期に起源を持つと考えられる民俗信仰の近代以降の「生き延び方」を考察した。

姜は、1970年代初めに人形の部落の若者を巻き込んだ結婚差別による心中事件が原因で、殆どが廃業に追い込まれてしまった阿波の木偶廻しが、約20年前に徳島市内の被差別部落で部落解放や同和教育の運動に取り組む人たちが復活させ、今日に至った過程を取り上げつつ、戦後、淡路島の人形伝統が再び活性化する過程で、ローが「ノスタルジア」を手掛かりに探りあてた人形遣いたちのアンビバレンス（被差別経験の「痛み」／人形遣いのアイデンティティ）とは対照的に、徳島県の事例は、スティグマのシンボルとして封印された人形を、同和教育や人権啓発活動のアイコンへ持ち替えたところに特徴があることに着目し、自らの過去を隠ぺいし否定させる社会状況と、埋もれた歴史と価値の再発見の狭間で、門付の人形芝居の復活が新たなローカリティを出現させる様態を捉えた。そこで、現在の儀礼細則（新正月から旧正月への門付の移行など）が被差別状況による変容の結果であること、残存する人形や衣裳や道具などの資料形態と人形遣いの足跡にみられる活動形態から地理的な意味が読み取れること、門付を受ける側は「三番叟」廻しを神事として、夷舁きを物もらいとしえ区別あるいは差別していることを明らかにした。

6月4日

「大和の口承文芸・折口信夫の原郷」フィールドワーク報告

杉浦 邦子（愛知県）

大会3日目の朝、バスは19名を乗せて出発すると、まもなく奈良県に入った。好天気恵まれ、関西のランドマークたる二上山（高木会長の言）をあちこちで眺めることができた。

初の見学地・當麻寺では、護念院住職・葛本雅崇師がご説明くださった。1400年前當麻氏の創建になるといふ當麻寺は元三論宗であったが、現在は浄土宗と真言宗の二宗兼帯となったため、本堂や護念院等浄土宗寺院は南向きから西向きへ変化させているとの



二上山



飛鳥坐神社

こと。また、寺院の背後（西方）に見える二上山の向こうは死後の世界を意味するという。こちら（東方）は生きている人の世であれば、極楽浄土を拝みたいと願って、中将姫が織り上げたという曼荼羅の伝えが身近なことに感じられる。その曼荼羅の転写本（室町時代）が祭られている本堂（曼荼羅堂）は、当初は小さなお堂であったものが立派に建て増しされている。練供養会式の準備を通して、伝統は当代の人々が新しく作っていくもの

だとおっしゃったお言葉を胸に當麻寺を辞した。

次に飛鳥坐神社に向かい、宮司・飛鳥弘文氏よりお話を伺った。折口信夫の祖父縁の神社とのこと、若き日の折口がこの神社に立ち寄って詠んだ歌が碑に刻まれている。榊の白い花と鶉の美しい境内を巡り、幾つかの歌碑やおんだ祭り関連の陽石等を拝見した。

道路の渋滞を免れて春日大社に着くと、教化課長の中野和正氏が出迎えてくださり、宮司の花山院弘匡氏には大切なお仕事の時間を割いて、貴重なお話をしていただいた。父君・親忠氏は戦後佐賀県に住われ、オートバイにオープンリールの録音機を載せて民俗資料を集められ、佐賀民俗学会を立ち上げられたそうである。我々の大先輩であった。中野氏は、元國學院大學説話研究会会員の由。広大な境内の本殿や各お社をご案内くださり、本殿では正式参拝を取り計らってくださった。歴史や伝説・民俗等も簡にして要を得た解説で分かりやすく、興福寺についての言及も興味深く伺った。



春日大社・花山院弘匡氏

各地の語り・語り手・語りの場の紹介（第7回）

小副川 肇（佐賀県）

◆昔話や伝説等の資料をより身近なものにするために-佐賀での取り組み-

佐賀県内では、筆者が確認しただけで、未発表資料も含め、現在、2万話以上の昔話や伝説等の聞き取り資料が眠ったままになっています。

伝承基盤が失われた今必要なことは、こうした貴重な資料をもっと身近に活用していこうとする地道な努力なのかもしれません。

県内でこうした資料の活用を担っているのが「さが昔話の会」と「佐賀民話の会」です。

「さが昔話の会」は3年程前に発足し、主に伝承を中心に活動している団体です。毎年、音響・映像を駆使して親と子供を対象に語り聞かせを行うイベントや語り手養成講座を開設するなど、多彩な活動を展開しています。

人気のある活動の一つに、真夏の夜に開催する怪談を聞かせるイベントがあります。佐賀に根付いた「子育て幽霊」や「化け猫」等の話をとりあげ、東西の語り手の競演という形で、映像（怪談映画

画像1「真夏の怪談」



（平成28年7月）



（平成30年8月）

等)や音響(琵琶の音色等)に合わせて、語りとして聞かせるものです。1昨年は石川県の語り手を呼んでお寺で開催しました(画像1参照)。

佐賀市特有の飴方(アメガタ)と呼ばれる乳菓子の話(「子育て幽霊」関連)や「ジネンボク(自然に生えたカボチャ等)は食べてはいけない」とする俗信にまつわる猫の話(「化け猫」関連)などの解説も加えて、単なる怪談としてだけでなく、地域に根付いた身近な話として聞いてもらうようにしています。



画像2「新佐賀市の民話」(2017年3月発刊)

一方、「佐賀民話の会」は昭和59年に発足した調査、研究活動を主とする団体ですが、活用面についても、これまで、方言による佐賀の絵本づくりなどを手掛けてきました。最近では、佐賀県立図書館企画の動画「佐賀の昔話」への制作協力に関わらせてもらいました。この企画は、佐賀の昔話や伝説などの採集資料の中から代表話100話を選び、話を動画にしてユーチューブにアップするものです。原画は美術専攻の高校生に書いてもらうとともに、語りは方言のままとし、原資料をできるだけ生かすようにしています。また、佐賀県における昔話、伝説などの特徴や伝承背景等を理解してもらうため話毎のほか県全体の伝承背景についても解説を加えたほか、話によっては、原資料の聞き取りデータを添付しています(画像2参照)。

画像3 佐賀県立図書館 Web版「佐賀の昔話」

※「佐賀の昔話」で検索



このWebページ及び動画は、「ふるさと納税」の寄付金を活用して作成しました。

「佐賀の昔話」について

- [はじめに](#) (PDF:138KB)
- [昔話とは](#) (PDF:133KB)
 - (1)昔話と伝説の違いの昔話の証型(タイプ)とは
- [県内における昔話の採集状況](#) (PDF:228KB)
 - (1)これまでの主な採集活動等
 - (2)本シリーズ掲載話(100話)の分類
- [県内で伝承されている昔話の特徴 その一 動物昔話](#) (PDF:184KB)
 - (1)「チョウチン」の「親不孝」(2)「時鳥」の「鳴声由来」
- [県内で伝承されている昔話の特徴 その二 本格昔話](#) (PDF:233KB)
 - (1)「3月3日の縁起由来」(2)「子育て幽霊」(3)「世子と尺八」
- [県内で伝承されている昔話の特徴 その三 笑話](#) (PDF:151KB)
 - (1)遊古衛門話
 - (2)その他の笑話
- [県内で伝承されている昔話の特徴 その四 伝説](#) (PDF:203KB)
 - (1)佐賀県の三大伝説
 - (2)その他の伝説
- [県内で伝承される話の背景\(語りの形式、語り手等\)](#) (PDF:168KB)
 - (1)語り形式
 - (2)語り手
 - (3)語り場所
- [その他](#) (PDF:157KB)
 - (1)語り手
 - (2)聞き取りデータ
 - (3)採集資料

番号	地区	タイトル	採話地	話者	話者生年	出演/ガリガリ
1	佐賀	羽衣六つ掛け六つ掛 (松立女)	佐賀市 大瀬町久尾井	森永 シゲ	昭和41年 (1926)	(-)
2	佐賀	思えんとおしからざん	佐賀市由緒町	柳原 啓子	大正14年 (1925)	音声
3	佐賀	稲がた屋さんと幽霊 (子育て幽霊)	佐賀市由緒町	柳原 啓子	大正14年 (1925)	音声
4	佐賀	有明探偵団話 「相撲取り」	佐賀市由緒町	藤原 タカエ	大正5年 (1916)	音声
5	佐賀	別荘式楽と宗家の娘	佐賀市由緒町	藤原 タカエ	大正5年 (1916)	音声
6	三津	風と蟹と狸	佐賀市由緒町	藤原 タカエ	昭和13年 (1900)	音声
7	三津	風の舟対 (カチカチ山)	佐賀市由緒町	大野 栄子	不詳	音声
8	佐賀	内野家の入柱	佐賀市大瀬町	山本 真白	昭和30年 (1903)	(-)



また、両団体が共同で作成したものに、平成29年度に作成した「新佐賀市の民話」（合併前の旧市町村単位の資料集）があります。各地の自然やお祭り等の写真をバックに、佐賀市内各地の代表的な話を厳選し掲載した資料集です。話は、方言、語り口などできるだけ聞き取り資料としての原型は崩さないようにし、また、話を聞いた際の状況等（誰からどのように聞いたかなど）もできるだけ残そうと努めました（画像3参照）。

なお、「さが昔話の会」は現在、文化庁の助成を得て、県民誰でも昔話や伝説等の語り手になったり再話をしたりして作成にも参加してもらうとともに、スマホでも楽しく見たり聞いたりできるように工夫した佐賀の民話約3,000話のデータベース化事業にも取り組んでいます。

こうした試みがいっ花開くか心もとない気もしますが、今やらなければ永久に花は咲かないままだと思ひ頑張っています。

事務局便り

○寄贈図書（2018年2月以降拝受）

- ・ 熊本大学文学部総合人間学科民俗学研究室
『熊民叢書 13 下須島～天草市牛深・下須島の民俗～』2018年3月
- ・ 『日本民俗学』294号 2018年5月／295号 2018年8月
- ・ 野村敬子・杉浦邦子（編）
『老いの輝き 平成語り——山形県真室川町——』瑞木書房 2018年7月

○日本口承文芸学会事務局

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28 國學院大學文学部 飯倉義之研究室

Tel: 03-5466-0529 (研究室) Fax: 03-5466-0368 (日本文学資料室)

E-mail: info@ko-sho.org

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会HP（<http://ko-sho.org/>）から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。入会金なし、年会費4000円です。郵便振替口座 00180-4-44834 をご利用下さい。